

今週の為替相場見通し(2024年1月15日)

総括表		先週の値動き			今週の予想レンジ
		注	レンジ	終値	
米ドル	(円)		143.43 ~ 146.41	144.92	142.00 ~ 146.50
ユーロ	(ドル)		1.0911 ~ 1.1000	1.0950	1.0850 ~ 1.1050
(1ユーロ=)	(円)		157.25 ~ 160.18	158.67	157.00 ~ 160.50
英ポンド	(ドル)		1.2675 ~ 1.2788	1.2751	1.2400 ~ 1.2900
(1英ポンド=)	(円)	*	181.80 ~ 186.16	184.67	182.00 ~ 188.00
豪ドル	(ドル)		0.6648 ~ 0.6734	0.6686	0.6620 ~ 0.6770
(1豪ドル=)	(円)	*	96.15 ~ 98.59	96.91	96.30 ~ 97.80

(データ)先週の値動きに関して、注の欄で無印の項目はみずほ銀行、*印の項目はブルームバーグ。

1. 米ドル

金融市場部 為替営業第二チーム 岩下 義明

(1)今週の予想レンジ: 142.00 ~ 146.50 円

(2)ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

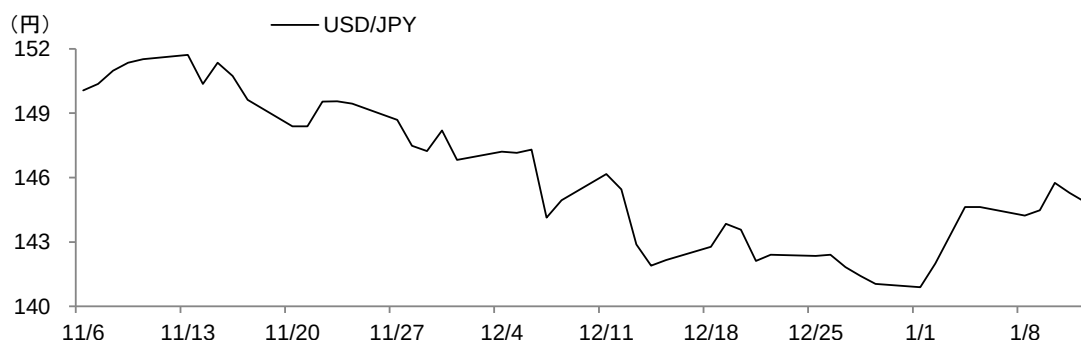
先週のドル/円は往って来い。8日は144.77円でオープン。アジア時間は東京休日で参加者も少ない中閑散。軟調なアジア株を背景にリスクオフで円買いが進む。海外時間も米12月インフレ期待が弱く出たことで米金利低下が低下し、つられて円高が進む。9日、朝方発表された日12月CPIは予想を下回ったものの反応は限定的であり、その後はアジア株安による再び円買い優勢となり週安値の143.43円まで円が買われる。海外時間は堅調な米3年債入札の結果を受け一時144.62円まで売られる。10日、前日からの米金利上昇の流れとウィリアムズ・NY連銀総裁のタカ派発言により終日円売りの流れが継続し145.83円まで売られる。11日、東京時間は日経平均株価が堅調に推移する中、円も買われやや円高に推移。米12月CPIはヘッドラインが予想を上回ったことでドル買いとなり週高値の146.41円を付ける。その後米国債がイベント通過後の買いが入り短期主導で金利低下する中でドル/円も値を戻し結局米12月CPI発表前と同水準の145.26円でクローズ。12日、東京時間は動意薄く145.20円を挟んで推移。米12月PPIは最終需要(前月比)が予想に反して▲0.1%と減少したことで手前の米金利が低下し、年内の利下げ期待が進む中でドル/円も円高に推移し144.92円で越週した。

今週のドル/円は上値の重い展開を予想。年初の能登半島地震を受けて日銀の早期政策修正期待は剥落しきってしまったものの、見方を変えればこの先は再び政策修正期待が膨らみやすいということであり、東京12月コアコアCPIも堅調に伸びていることから方向としては政策修正期待が入り込みやすい地合いになっていると思われる。一方、米国では堅調なCPIを通過し、Fed高官のタカ派発言をもってしても市場の年内の利下げ織り込みが後退しておらず、ここから政策金利維持のサポートとなる材料をすぐには見つけるのが難しいか。投機筋の円先物ショートポジションも昨年11月中旬をピークを付けた後の縮小傾向が継続しており、円安圧力は一時期に比べ和らいできている。今週は17日(水)に米12月小売売上高、18日(木)に米12月住宅着工件数、19日(金)に日12月全国CPI、米1月ミシガン大学消費者マインド/期待インフレ率が発表される。物価においては将来のインフレの見通しが物価に反映されるという自己実現的な部分があるため、その見通しの水準であるインフレ予想と、見通しの不確実さを示すインフレ予想の標準偏差に注目したい。

(3)先週までの相場の推移

先週(1/8~1/12)の値動き:

安値 143.43 円 高値 146.41 円 終値 144.92 円



(資料)ブルームバーグ

2. ユーロ

金融市場部 為替営業第二チーム 伊藤 基

(1) 今週の予想レンジ: 1.0850 ~ 1.1050 157.00 ~ 160.50 円

(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週のユーロ/ドルは、週を通して見れば、1.0950を挟んで方向感に欠ける値動きとなった。週初は1.09台半ばでスタート。独11月製造業受注が予想を下回ると、独金利低下に伴い、1.0920台まで下落した。9日は独11月鉱工業生産が予想を下回ったことや、センテノ・ポルトガル中銀総裁の「金融緩和を開始するのに5月まで待つ必要はないと思う」等の発言を受け、じり安での推移。加えて、米金利が上昇する動きが下押し要因となったこともあり、週を通しての安値である1.0911を付ける場面が見られた。10日は、仏11月鉱工業生産（前月比）が予想を上回ったことや、米金利低下が支援材料となり、小幅上昇。シュナーベルECB専務理事が利下げの時期に関する論議は時期尚早との見方を示すと、独金利上昇に伴いユーロ買いが優勢となり、1.0970手前まで上昇する場面が見られた。11日は米12月CPI結果待ち姿勢から、1.0970付近での狭いレンジ推移からスタート。その後公表された米12月CPIが市場予想を上回る結果になるとドル買い地合の中、1.0930台まで下落。その後は米金利低下を横目に1.0980台まで上昇。12日は、米12月PPIが市場予想を下回る結果になったことを受けドルが多く通貨に対して売られる中、ユーロ/ドルは上昇し、一時1.0980台を付ける場面が見られた。ただ、ユーロ買いの動きは長くは続かず、結局1.0950まで値を戻し週末を迎えた。

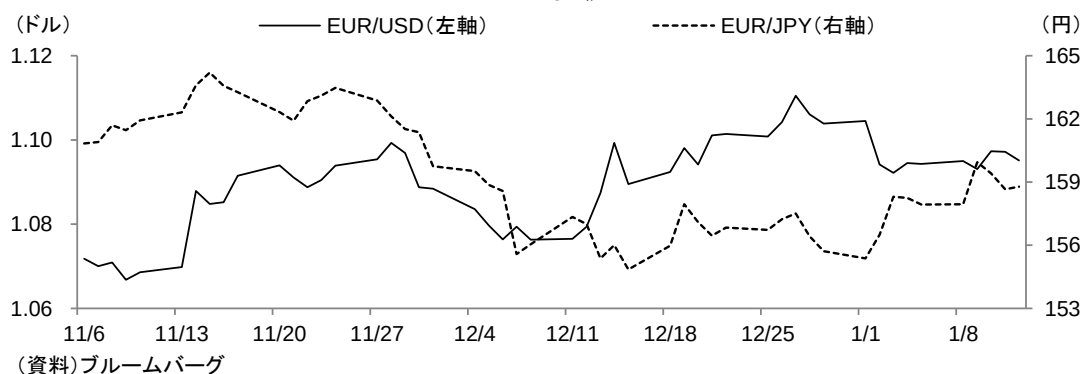
今週のユーロ/ドルは、引き続き方向感に乏しい展開を予想。先週、ラガルドECB総裁は「物価上昇圧力の鈍化が確認できれば利下げは可能」などと発言していたが、賃金上昇圧力が強い中、サービス価格が高止まりしている現状だと早いタイミングで利下げを行うのは困難であろう。一方で、ユーロ圏の景気は力強さを欠いているのも事実であり、インフレと景気動向のバランスを見ながら、ECBは難しい舵取りに迫られている。こうした中では、先々の金融政策に対して明確な方向性を見出すことは難しい。その結果、経済指標の結果の強弱によって相場が振れることがあったとしても通して見れば、方向感に欠く展開が今週も続く可能性が高そうだ。今週は、15日(月)にユーロ圏11月の鉱工業生産、16日(火)に独1月ZEW景気期待指数などの公表が予定されている。公表結果によっては、相場が大きく動く可能性があるだけに注意したい。

(3) 先週までの相場の推移

先週(1/8~1/12)の値動き:

(対ドル) 安値 1.0911 高値 1.1000 終値 1.0950

(対円) 安値 157.25 高値 160.18 終値 158.67



3. 英ポンド

欧州資金部 中島 將行

(1) 今週の予想レンジ: 1.2400 ~ 1.2900 182.00 ~ 188.00 円

(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週1週間の英ポンド相場は、11日公表の米12月CPIの市場予想上振れに伴うドル上昇、12日公表の米12月PPIの下振れに伴うドル下落、と主に米経済指標の動向によって大きく左右される展開となったが、1週間を通してみれば方向感に乏しく、ほぼ横ばいの展開となった。英国の個別要因では12日に公表された英11月GDPが注目を集めた。結果は前月比+0.3%と、10月の同▲0.3%からプラスに転じた。ブルームバーグ集計の民間エコノミスト予想では11月は同+0.2%が見込まれていた。12月分の月次GDP及び2023年10～12月期のGDPは2月15日に公表される。2023年7～9月期の実質GDPが前年同期比▲0.1%だったことを踏まえれば、10～12月期もマイナス成長となれば、英経済は定義上のリセッション(2四半期連続のマイナス成長)入りとなる。12月は悪天候に見舞われたほか、ストライキもあったことを考慮すれば、12月GDPの結果は芳しくないと見られ、景気後退入りのリスクはなお残る。実際の景気後退入りとなれば、イングランド銀行(BOE)の早期利下げを望む声が、企業から強まるシナリオが市場で意識されるものと見られる。

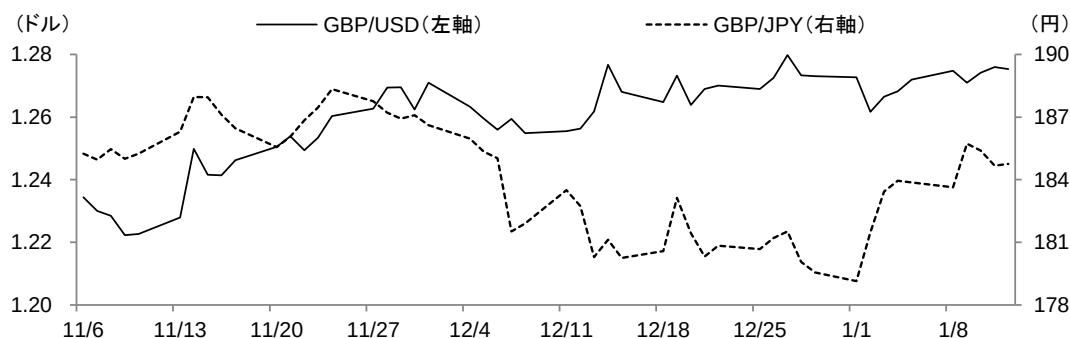
今週1週間のポンド相場は、引き続き外部要因に左右される上値の重い展開となろう。とりわけ、米国の実体経済を示す指標、17日(水)米12月小売売上高、米12月鉱工業生産は意識する必要がある。また、2024年米大統領選挙における共和党の候補者選びが本格化することも注目を集めそうだ。英国個別の要因では、16日(火)に公表される労働市場関連統計や、17日(水)に発表される英12月CPIが焦点となる。市場予想では、労働市場関連統計では、9月～11月の平均賃金の伸びが前年比+6.8%と8月～10月の同+7.2%から減速すると見込まれているほか、英12月CPIでは食料とエネルギーを除いたコアCPIが前年同月比で2年ぶりに5%を下回ると見込まれている。こうした予想が実現した場合、BOEの早期利下げに根拠を与えるものとして市場で受け止められる公算が大きい。

(3) 先週までの相場の推移

先週(1/8～1/12)の値動き:

(対ドル) 安値 1.2675 高値 1.2788 終値 1.2751

(対円) 安値 181.80 高値 186.16 終値 184.67



(資料)ブルームバーグ

4. 豪ドル

アジア・オセアニア資金部 シドニー室 安藤 愛

(1) 今週の予想レンジ: 0.6620 ~ 0.6770 96.30 ~ 97.80 円

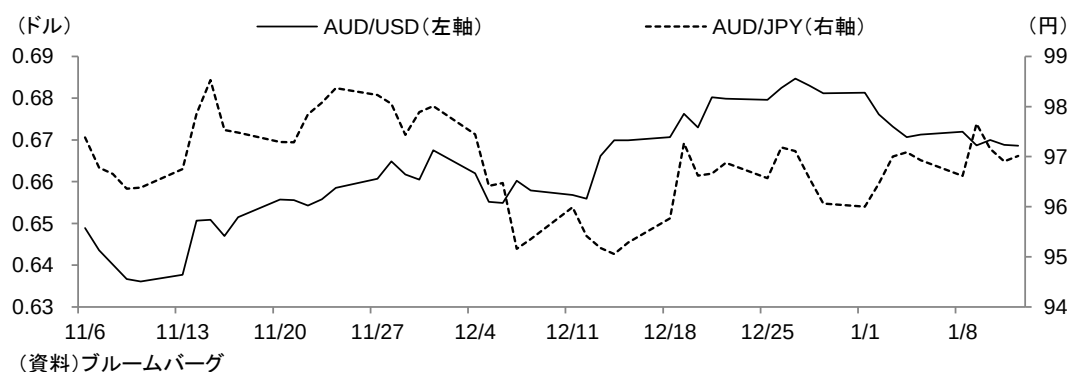
(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週の豪ドルは0.6700を挟みもみあい。8日(月)0.6720近辺でスタート後、アジア時間内は小安く推移。米12月NY連銀1年先インフレ期待が3年ぶり低水準となったことを受けて、米国債利回りが低下、株価が上昇。この流れを受けてドルが下落する中、豪ドルはオープン近辺まで買い戻され、一日を通して往って来い。9日(火)豪11月小売売上高や豪11月住宅建設許可件数が予想以上に堅調だったことを受けて、序盤は小高く推移。その後、米国株が下げる中でドルが上昇すると、豪ドルは下落に転じ0.6690近辺で引け。10日(水)注目された豪11月CPIは前年比+4.3%と22年1月以来の低い伸びとなった。ただし、豪11月CPIの減速は既に多くの参加者が予想しており、この発表を受けた相場への影響は限定的であった。米株価がじりじりと上昇する中、豪ドルも底堅く推移して0.67近辺で引け。11日(木)米12月CPIが予想を上振れ、米金利上昇、ドル買いとなり、豪ドルは一時週安値の0.6648まで下落。しかしその後はFEDの利下げスタンスを変えるほどの数字ではないとの見方から、米債買い戻しが見られ米金利は低下。豪ドルは0.6690近辺まで買い戻されて引けた。12日(金)、米12月PPIが予想を下回ったことを受けてドル売りが優勢となると、豪ドルは一時0.6730近辺まで上昇した。その後、米金利が低下一服するとドルが買い戻され、豪ドルは再び0.6690近辺まで下落して越週。

今週の豪ドルは底堅い値動きを予想する。注目指標は17日(水)中国10~12月期GDP、米12月小売売上高、18日(木)豪12月雇用統計、19日(金)1月ミシガン大学消費者マインドなど。豪雇用統計に関しては前回値(11月)が予想以上に強い結果となり、折からのハト派的なFOMC声明文も相まって年末にかけて豪ドル上昇に弾みをつけるきっかけとなった。豪12月雇用統計に関しては雇用者数が+1万5000人増加、失業率は前月同様の3.9%が事前予想となっている。年初より米利下げ織り込みの巻き戻しの動きが入り豪ドルは下落基調となっていたが、先週発表された米12月CPIが予想を上振れても豪ドルは0.6650近辺でサポートされ底堅さを見せた。今週発表される豪12月雇用統計が予想以上に強い内容となった場合、豪ドルは上値を追う可能性があるとする。

(3) 先週末までの相場の推移

先週(1/8~1/12)の値動き:



当資料は情報提供のみを目的として作成したものであり、特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。当資料は信頼できると判断した情報に基づいて作成されていますが、その正確性、確実性を保証するものではありません。ここに記載された内容は事前連絡なしに変更されることもあります。投資に関する最終決定は、お客様ご自身の判断でなさるようお願い申し上げます。また、当資料の著作権はみずほ銀行に属し、その目的を問わず無断で引用または複製することを禁じます。なお、当行は本情報を無償でのみ提供しております。当行からの無償の情報提供を望まれない場合、配信停止を希望する旨をお申し出ください。